慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	競争優位と戦略グループ
Sub Title	
Author	金昇範(Kin, Sumbomu) 矢作恒雄
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1989
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1989年度経営学 第680号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001989-0680

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

No. 0680

学生氏名　金　昇範　　主査　矢作恒雄
副査　片岡一郎
所属ゼミナール　矢作恒雄研　　青井倫一

競争優位と戦略グループ

戦略グループという用語は、Hunt(1972)によって初めて紹介された。産業組織論は、業界を一つの分析単位として扱い、競争の本質と企業の基本的な収益性はその企業の属する業界の構造や特性によって決まってくると説明していた。しかし、これだけでは同一業界で生じる企業間の収益性の格差は説明しきれない。このような疑問に答えるための一つの手段として「戦略グループ」の概念が導入された。

Porter(1980)は、ある産業の中での数多くの企業は、競争戦略という点で様々な施策をとっているが、それらの間の相互関連性や整合性に着眼すると、いくつかの限られた数の類型を引き出すことができるといい、その同じ類型にあてはまるいくつかの企業群を「戦略グループ」と名付けている。この「戦略グループ」の概念を利用すれば、業界の内部構造や企業間競争の原理に対するより明確な理解が可能になると主張している。

本研究は、「戦略グループ」モデルを使って1973年から1988年までの製薬業界を分析した。方法論および分析のフレーム・ワークについては、Cool & Schendel(1987)の研究を大いに参考にした。業界の内部における「戦略グループ」の存在、またグループ間の経営成果について仮説を構築し、実証を行った。その結果、製薬業界には戦略上の特徴によりいくつかの戦略グループが形成されていることや同業界が16年の間二回にわたる構造変化を経験していることが確認された。また業界が比較的安定した時にはグループ間の経営成果に有意な差もみられたが、環境が厳しくなった時にはその差がなくなることが確認された。環境の変化に対応してグループ間移動を試みる企業の例もいくつか発見された。

「戦略グループ」に関する理論が業界の内部構造の分析手段として有用であることが再び確認された。